

は じ め に

今年の夏の気象は様々な異変が見られました。気温 40℃を超える日が続いたり、「これまでに経験したことのないような大雨」が全国各地で記録されたり、穏やかなはずの四季の変化が過激なものに変わってきているようです。

原因はいろいろと唱えられていますが、地球温暖化もそのひとつに挙げられています。地球温暖化も様々な要因がいろいろと絡み合っただけ発生したものではありませんが、その防止に対して、二酸化炭素の吸収など森林の果たす役割はとて大きく、健全な森林を育てていくことが、地球規模で求められています。

独立行政法人森林総合研究所は、地球温暖化の防止のみならず、国民の様々なニーズに対応するため、平成 23 年 3 月に第 3 期中期計画を策定し、研究開発の実施を通じた成果の社会還元を目指しています。中期計画の 2 年目となる平成 24 年度は、林木の新品種の開発目標数が概ね 45 品種に対して 49 品種を開発しました。その内訳は、林業の再生、ひいては森林の育成による地球温暖化防止に資するために、初期成長に優れたスギ品種 22 品種を開発しました。また国土・環境の保全のために、マツノザイセンチュウ抵抗性マツを 27 品種開発し、特に、抵抗性クロマツ同士を掛け合わせてより抵抗性の強い第 2 世代の抵抗性品種を 5 品種開発しました。

研究開発においても、剛性の指標であるヤング率について、スギでは遺伝的支配が大きいことや DNA の分析によるシラカンバの地理的な遺伝変異を解明しました。バイオテクノロジーの分野では遺伝子組換えによるスギ花粉形成抑制技術を開発し、そして、海外との協力においても熱帯・亜熱帯に広く分布するテリハボクについて、耐風性等に優れたものを選抜するための育種素材を収集するとともに、遺伝変異の解析を進めました。

林木遺伝資源の探索・収集については、育種素材として利用価値の高いものや希少性の高いものを中心に収集目標数概ね 1,200 点に対して 1,293 点を収集し、保存、評価、配布を行いました。

苗木についても、全国からの要請に応じ 31 道府県、11,718 本を配布し、新品種等の普及に努めました。

また、平成 25 年 5 月に改正された「森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法」では、森林による二酸化炭素の吸収作用の保全及び強化の重要性に鑑み、間伐の促進とともに、樹木による二酸化炭素の吸収の強化を図るため、成長に優れた種苗の母樹の増殖に関する計画制度が新たに導入されました。これにより、成長に優れた種苗として林木育種センターで開発してきた第 2 世代精英樹等の普及の促進が期待されます。

このように平成 24 年度の林木育種において、都道府県の林木育種に関係する方々をはじめ、多くの皆様のご協力により順調に成果を上げて参りました。今後も国民の目線に立ったさらなる研究、事業の実施に邁進して参りますので、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成 25 年 10 月

独立行政法人森林総合研究所

林木育種センター所長 井上 達也